

トホホ家族計画

kaji0213

ちりんちりーん。

俺の朝は新聞の朝刊の配達で始まる。なぜ俺が朝刊の配達をしてるかってそれは俺の馬鹿親父が働かないから仕方がないから俺が働くことになっている。俺の親父結託（むすび たくむ）は小説家だ。かつては文学賞を取る程の人間だったが今はただの旅行狂だ。暇があればどこかへ出かけて家になんて殆どいないことがしょっちゅうだ。

朝刊の配りが終わったら朝食の準備と掃除、洗濯、弁当作りと続く。なんで俺がそんなことをやってるかってそれは俺の母親が何も家事等をしないからだ。俺の母親結式（むすび しき）は夜にパートに出かけて昼は寝ているかネットゲームばかりしている。前に俺がゲームばかりやってるなら家事やってくれよと頼んだことがあるが「いいじゃん。実がやってくれるんだし」と言われた。お前がやらねえから俺がやることになってるんだよと突っ込みたかったがこの母親に何を言っても駄目だということに気づいて俺は諦めることにした。何事も諦めが肝心だ。ちなみにいい忘れたが俺の名前は結実（むすび みのる）だ。別に覚えなくてもいいが。

家事等を一通り終わると次の作業は姉と妹を起こす作業をしなければならない。俺の姉、結社（むすび やしろ）は「なんで恐怖の大王来なかったんだろ？」が口癖のおかしい姉だ。家に居るときは常に鬱状態で非常に困っている。

「社姉。起きて。朝だよ」

しばらく揺ると姉さんは体を気だるそうに起こした。社姉は周囲を見回して俺を見た。

「ああ。また今日が始まったのか。いっその事寝ている間に世界が崩壊でもしていればよかったのに……」

朝からまたそんなテンションが下がるようなことを言い出した。

「もうそれはいいから早く準備してよ。姉さん来なかったから置いてくからね」

姉さんはベットから出て立ち上がると俺を見てうな垂れだした。

「ああ。ついに弟にまで見放されてしまったか。私は終わりだあー！」

そう言いながらベットに再び倒れた。本当に面倒な姉だ。

「頼むから素直に起きて来てよ。本当に遅刻するからさあ」

俺が懇願して頼むと姉さんは目玉を鋭く光らせ俺を見た。少し怖いんですけど。

「なら。実。私に起きて欲しかったら『お姉さまお願いですから起きてください。お姉さまが一緒でないと僕は学校にいけません。頼みますから起きてくださいませんか』と言え！」

また始まったと思ったが早く姉を起こすには従うのが一番だと言うのは今までの経験上を俺は分かっていたのでしぶしぶ従うことにした。

「オネエサマオネガイデスカラオキテクダサイ。オネエサマガイッショデナイトボクハガッコウニイケマセン。タノミマスカラオキテクダサイマセンカ」

「実！　なんだそれはまるで心がこもってないじゃないか！　もう一回だ！」

「姉さん。もういいじゃないですか」

「だめだ！　もう一回だ」

俺はその後三回ほどこの台詞を言ってなんとか姉さんが許してくれたので次は妹を起こしに行くことにした。

俺の妹、結審（むすび　あきら）は俺の一学年下　だがこいつは常に俺のことをはめようと色々やってくる困った妹だ。

「入るよ。審」

妹の部屋をノックしたが返事はなかった。まあいつものことなので俺は部屋に入ることにした。部屋の中に入ると審は起きていないようだった。

「審。朝だよ。起きて」

ベッドで眠っている審を揺すって起こすことにした。しかしなんとなく感触が違うような気がした。俺は嫌な予感がして布団を取った。

「いない！！」

ベッドの上にはバナナの抱き枕があるだけで妹はいなかった。いったいどこにいるんだ。俺は部屋中を探してみた。しかし妹はどこにもいなかった。

「いったいどこに行きやがったあいつは」

「何やってるの？　あにい」

振り向くと部屋のドアの前に審がいた。どうやらもう起きてトイレかどこかに行っていたらしい。

「まさかあにい。妹の部屋荒らしてー」

「頼む。そこから先は言うな」

「言うなって※※とか※※とかのこと？」

「おい！！　※※とか言うな！！　色々と問題になるだろ！！」

「別に構わないでしょ※※くらい」

「とにかく朝食できたから早く準備して降りてくれ」

「はいよ～」

俺はぐったりと疲れて朝食を食べるために1階の居間に降りた。居間では姉さんが味噌汁の器を持ちながら固まっていた。聞いてもろくな事じゃないだろうけど聞かないと後でごねられるのも

面倒あったのでとりあえず社姉に質問した。

「姉さんどうしたの？」

姉は味噌汁を持ったまま俺を見た。

「ねえ。今日のおうし座の運勢最悪なんだけど待ち人来たらずだって。決めた私今日家から出ないから」

「……」

もう面倒臭いからスルーだ。姉はかなり憤慨していたが俺が相手してくれないと分かって泣きながら味噌汁をすすっていた。

「ただいまー。おやすみー」

どうやら母親が帰ってきたようだがそのまま部屋に行って寝に行ったようだ。

「あれ？ 社姉何泣いてるの？」

「ううん。何でも無いよ。味噌汁の塩気が染みただけ……」

姉はもっと突っ込んで欲しいらしくちらちらとこちらを伺っていたが俺はひたすらスルーを決めていた。

なんとか朝食も終わり俺と姉と妹で学校に向かった。俺たち兄妹は同じ学校に通っていたのでよく一緒に学校に登校していた。俺たちの通っている羊が丘高校（ひつじがおかこうこう）は家から電車で20分ほどの学校だ。姉が3年で俺が2年で妹が一年だ。なぜこの高校かと言うと家から一番近くてそこそこいい学校だからそれだけだ。俺は今日も姉と妹と一緒に電車に揺られていた。そこで一つの事件が起きた。

「この人痴漢です！」

と俺の手をあげる妹の審。

あっという間に近くの男に捕縛され近くの駅に降ろされる俺。

妹だと言っても信じてくれない駅員さん。

「嘘を付くなお前にこんなに可愛い妹さんがいるわけがないだろうが」

問答無用で連れて行かれる俺たち。

必死に駅員室で弁明する俺。

その様子に本気だと感じ始めた駅員さん。

我関せずの姉。

雲行きが怪しくなったのを感じ始めて兄だと認めて方針転向を始めた妹。

「兄のちょっとした悪戯なんです。許してください」

と泣いて謝る妹。

それを聞いて「うわー。卑怯臭え」と思う俺。

「そうなんだ。そうなら最初から言ってくれよ」

と態度を軟化させる駅員さん。

その上で妹さんに謝りなさいと怒られる俺。

終わりそうにないので謝ることにする俺。

「もう止めてよね。あにいのエッチ」

お約束の台詞を頂いてため息を吐く俺。

とりあえず釈放される俺たち。

満足顔の審さん。

我関せずの社さん。

朝から思わぬことがあったがなんとか学校に着くことができた。姉は学校に着くなりこんなことを言い出した。

「だるい。隕石とか落ちて学校潰されないかな」

同意したいところだがそんなことは起こりえないと心の中で俺は突っ込んだ。

「そんなことあるわけないでしょ」

と妹は俺の代わりにクールに突っ込んでくれた。姉はその後も学校を見つめて悲しそうな目をしてはため息を吐き続けた。まったくいつもなんでこんなに憂鬱なんだろうか。この姉は。

「おはよー。社」

と社姉の友達が声を掛けてきた。

「あ。おはよっ」

とさっきまでの人生の最終極点に立たされていたような顔から一変して社姉は人懐こい満面の笑みに変化(へんげ)した。いつみても職人芸だなあと俺は思った。社姉は異常に外面はよくて学校の中では猫500匹くらい被っている。俺はその分そのギャップに苦しんでいる。

「早くしないと遅れるわよ」

妹のクールな言葉に現実に引き戻された俺は学校に急いだ。姉と妹の接点が少ない学校だけが俺の心の休まる場所だ。こんにちは学校。俺のベストプレイス。

だがそう人生はうまく行かないものだ。学校でも俺の気は休まらないのだ。

「2年C組の結実君、職員室まで。繰り返します……」

午前の休み時間俺は急に呼び出されることになった。行ってみるとお姉さんの具合が悪いそうだから連れて帰ってくれとのことだ。

「なんで俺なんですか？」

「なんでってお前の姉さんだろうが」

この教師はやたらと姉さんのことを気に入っているみたいなのでも当然という感じで言った。保健室で寝ているということなので行ってみると社姉はベッドで寝ていた。

「ごめんね。実。なんか具合が悪くなってきて」

「別にもう慣れたからいいけど今度はどうしたの？ ついにアルマ○ドンでも召喚されたの？」

俺そう言うと社姉はベッドの上で力が無く首を振った。そして、遠い目をしたかと思うと急に世界の終末を見つめるヒロインのような目をした。

「そんなことじゃないの。あのね。鉛筆がね。鉛筆の芯がね……折れたのよ」

「うん。それで？」

「それでって鉛筆の芯が折れたのよ！ 私とても悲しくなって具合悪くなっちゃった」

「まさかそれだけじゃないよね！？」

「実。姉さん怒るわよ。それだけってあのね。一本だけじゃないのよ。使う鉛筆の芯がことごとく折れていくのよ。最後には使える鉛筆が無くなっちゃった。姉さん。もうだめみたい」

そう言って社姉は手を胸の前で組んで目を閉じた。埋葬でもしてほしいんだろうか。

「実……。できたら私の灰は海に流してくれるとうれしいな」

社姉がそんなことをほざいたが俺は病院に連れて行こうか家に連れて行こうか迷ったが家に連れて帰ることにした。社姉。明日はきっといいことあるよ。

別な日、俺が昼休みに学校の廊下で歩いていると友達2、3人と一緒に妹の審と出くわした。正直学校では妹とは係わり合いになりたくなかった。なぜならば

「あ。兄さん見っけ」

審はそう言うと俺に抱きついてきた。妹は学校ではなぜか兄さん大好きっ子を装っているのだ。

「審って本当にお兄さんのことが大好きなんだね」
「うん。実兄さんってかっこよくて、やさしくて私大好き」

そう言ってより一層力を込めてくるので俺は何を企んでいるのかと思った。俺の全身から汗が噴出し、鳥肌が立った。俺はそれを悟らないように恥ずかしいから やめてくれと言って妹を突き放した。

「きゃっ。兄さんひどい」

審は大げさに転んで見せて上目遣いで俺を見た。それを見た周りの審の友達が審に駆け寄った。

「お兄さんどういうことですか！ 審にこんなひどいことするなんて」
「先生—！ 審のお兄さんが審をいじめてます—」

審の友達は「大丈夫？」とかなんとか言いながら審を抱き起こした。俺はやっぱりこういうことになったかと思い、頭が痛い思いをしていたがさらに頭が痛い自 体が起こることになった。またあの教師がやってきたのだ。

「おい！ 何事だ。うん？ 結！ またお前か」
「俺は何もしてないんですが……」

弁解はして見たがこの教師は聞いちゃいなかった。

「お前は姉だけに飽き足らずに妹にまで……。ちょっと来い。個人的に言いたいことがあるから生徒指導してやる」
「え！ ちょ。ちょっと待ってくださいよ。先生」

俺は無理やり先生に引っ張られて生徒指導室まで連れて行かれることになった。引っ張られながら審を見たら審はしてやったりという笑みを一瞬見せたのを見逃さなかった。その後教師から姉と妹というものはいかに尊いものかということをも2時間に渡って説かれ、姉妹を大切にするという反省文を10枚書かされた。

家に帰ってもまた一仕事がある。母親にゲームを止めさせて仕事に行くようにさせなければならぬからだ。暇つぶしで始めたネットゲームだが今では中毒と 言ってもいいくらいにはまっていて放っておくと寝る間を惜しんででもゲームをやっている。母親は朝仕事から帰ったら寝て、起きたらそのまま仕事時間ぎりぎりまでネットゲームをやっている。

母親の部屋に入ると案の定絶賛ゲーム中だった。

「母さんそろそろ仕事に行かないと」
「……。そうだね」

最初が生返事というのはいつものことなので俺は特に気にはしなかった。さて今日はどんな方法で止めさせようか。

「母さん！ さすがにそろそろ止めないと仕事遅れるよ？」

「実……。私がないとね。チームが全滅してしまうのよ。ここで抜ける訳には行かないのよ」

そんなに仕事よりゲームが大事なのかと思ったが世間にはそういった人間が多いと聞くし、俺も多少はネットゲームはやったこともあるのでその世界のことについてはある程度理解しているつもりだった。この前なんか合宿があるとか言って仕事を休んでまでゲームをして最後は眠気に勝てなくなって寝落ちしていた。

「ねえ。母さん。仕事だとか言って抜ければいいじゃない？ それなら誰も無理に引きとめないでしょ」

「まあ。そうなん……。だけどね。なんか途中で抜けるのが悪いような気がしてね」

そう言いつつ母さんの手は止まらなかった。熟練の手つきでマウスとキーボードを操作してPC上のキャラクターを操作していた。今は主婦でもネットゲームにはまっていて離婚したとか結構問題になっているみたいだからな。埒があかないので俺はいつもの奥の手を使うことにした。その方法とは俺が母さんのやっているネットゲームに入り込んで直接母さんがPTを組んでいる仲間に交渉するという作戦だ。うまく説得できれば問題ないのだが決れそうなら俺が母さんと交代して俺が代理でPTを維持したりなどしていた。

今回はなんとかうまく交渉がい行った。何回かやり取りするうちに母さんの仲間にも俺のことが認識されるようになり今までは殆ど俺も仲間同然だった。

「こっちは大丈夫だから母さんは早く仕事に行って」

「わかったわよ。行けばいいんでしょ。あーあ。めんどー」

そう言いながら母さんは部屋から出て行った。まったくどうしようもない母親だなと思ったが働いているだけまだましかもしれない。なにせ父親の方がもっとひどい人だからだ。

俺はなんとか切の良い所でPTを抜けてログアウトした。部屋から出て居間に行くと父さんが何か変な置物を磨いていた。俺の父さんは前に言った通りに旅行狂だがそこで毎回変な置物を買ってくるのだ。おかげで家の中はあちらこちらに置物が転がっていた。たぶん量なら下手な骨董屋よりは在庫を持っていると思う。変なものが多いので俺はものすごく薄気味悪かった。

「父さん、そんなもの磨いてないで仕事してよ。小説は進んでるの？」

「それよりも聞いてくれ。次はバチカンとか攻めてみようかと思ってるんだがどうだ？」

父さんは俺の話は全然聞かないで全く関係ないことを話し始めた。俺の父親は恋愛小説家の癖に取材旅行だと言ってばかり行きたがる。仕事はちっともしないくせに。ただ書くようになるとどこかの漫画家のようにものすごい作品を書くからたちが悪い。編集部の人たちもその点は評価しているらしく放任している。ただ当たり前のことだが書いてくれないと家には一銭も入らない。だから俺と母さんとでなんとか日々の生活を維持しているという訳だ。

旅行に行かないときはこうして家にある置物磨いたり次はどこに行こうかなどということをや々と考えていた。

「父さん。聞いてくれ。父さんが働いてくれないと俺たちは生活できないんだよ！ なんでもいから仕事してくれよ。そうだ雑誌のコラムとかでもいいんじゃない？ 前に編集の前田さんが—」

「いやそれよりもムー大陸とか探しに行ってみようか。どっちも捨てがたいな。いやどっちも行くと言うのも良いかも知れんな」

「父さん……」

父さんには俺の話は全然耳に入っていないようだった。俺は諦めて居間を後にすることにした。何かどっと疲れたような気がした。俺は早いけど今日の所は寝ることにした。

部屋に行くとき社姉はすでに眠っていた。俺と社姉はここ何年か同じ部屋で寝ることになっていた。それは姉さんが自殺しないように見張るためだ。前は別な部屋だったがたびたびリストカットしようとするので何年か前から同じ部屋で寝ることになった。

姉さんのすすり泣きや呪詛が聞こえてくるので非常に寝にくい。

「なんで……一巻が……借りられてるんだ。シクシク……私絶対に許さない！」

「いっその……こと」

またかと思ったがこのままでは俺が眠れない。社姉はいつも小さなことで絶望感を感じ鬱になる。今日はどうやらレンタル屋で借りたいDVDの一巻がなかったようだ。俺は社姉のベットの近くまで行って優しく囁いてやった。

「社姉。それなら明日俺と一緒に2巻を借りてこよう。そしてその一巻を借りた人が返しに来るのを見守ろうよ。その人が2巻を借りようとして2巻が無かったらどんな顔をするんだろうね。ねえ。社姉楽しみじゃない？」

「っ！ 実……。ありがとう。そうだね。最初からそうすればよかったんだ。なんで気付かなかったんだろう。これで明日の生きる活力が得られる。姉さん何か少し疲れた。眠るよ」

「うん。お休み。社姉」

そう言うと社姉は安かに眠りに落ちた。俺にできることは夢の中だけでもいい夢が見れることを祈るだけだった。俺はベッドの中で自分の中にこんな醜い考えが出ることに恐怖していた。俺はここ何年かの内はかなり薄汚れているようだった。家族のためだとはいえ、俺はなんていう考えが浮かんでしまうのだろうか。

俺は昔のことを思い出していた。

『昔はこんなじゃなかったのに……』

俺は平穏だった昔を思い返していた。まだ真面目に仕事をしていた頃の父親。

「どうだ。父さん。芥川賞を取った夢を見たんだぞ」

「わあ。父さんすごいや。僕も大きくなったら父さんみたいな小説家になるよ」
「ああ。そうだな。そのためにはな。色んなものを見て、経験しておくといい、全て創作の糧になるんだからな」
「それでな。今回も小説の書き方の練習するぞ。実ならこのテーマならどう書く？」
「僕ならね。こう……だね」
「さすが俺の息子だな。じゃあ……はどうだ」
「これはね。こう……だよ」
「ほうほう。実。お前なら今からでもデビューできるんじゃないか」
「えへへ。そうかなあ」

今思うと父さんの賞を取った時の作品は俺が書いていたのかもしれない。

PCを知らなかった母親。

じゃんじゃんぱりぱり

パチンコ中毒だった。

「奥さん！ 子供つれてきちゃだめだってあれ程言ってるじゃないですか」
「うるさいわね！ 私は客なのよ。子供連れてきて何が悪いっていうのよ。やった！ 当たった確変よおお。実！ ちょっとたばこ買ってきて」
「奥さんあのですね……」
「あんたもぼさっと立ってないで箱持って来なさいよ！」

今の方がまだ……ましかも知れない。

いつも完璧だった姉

「これも駄目。駄作。駄作—！」
「ね。姉さん。どうしたの？」
「果物の絵を描いてくる課題が出てるんだけどどうしてもりんごの瑞瑞しさが表現できないんだよ」

破り捨てた絵を見たがまるで写真で取ったくらいのクォリティーの高さだった。何がだめなのかその頃の俺には分からなかった。今思えばその完璧主義が今の些細なことで鬱になることに繋がっているのかも知れなかった。

まだ可愛げあった妹。

「お兄ちゃん—！ こっちだよ—」
「審—！ 今行くよ—」
「こっちだよ—。もうちょっと左、ううん、右だよ—」
「どっちなの—。あきら—。わかんないんだけど—」

「そんな？ 実がいるから楽できるのに」

母さんが思わず本音をもたらした。その言動がさらに俺の怒りのゲージをマックスにさせた。

「それがいけねえんじゃねえのか！」

俺は思わず右の拳を床に叩き付けた。右拳の痛みで俺は瞬間的に冷静になった。もしかしたらこれでこの家族を改革出来るかも知れない。俺は実行してみることにした。目の前にはまだ腰を抜かしている親父がいた。

「まず親父！ お前はいつまでそんなスナ○キンみたいな生活をしたがるんだ！ もう止めろ！ 止めねえっていうならな。親父がイースター島で盗って来たモアイ像破壊するからな」

俺は玄関にあるモアイ像を指差した。さすがの親父はこれには反応して立ち上がって抗議してきた。

「実よ。それは卑怯ではないのか！」

「親父……。それが嫌だったら言うとおりにするんだな。悪いが俺はこのモアイ像を破壊するために少林寺拳法を習った。こんなひび割れたモアイ像くらい一発だぞ！」

俺はモアイ像に近寄るとモアイ像の近くで殴る真似をしてみせた。親父は俺が見たことが無いほどに顔を青ざめて大量の汗を掻いていた。

「む。むう」

さすがの親父も黙ってしまった。よし。これで親父は攻略終了だ。

「そして母さん。あんた俺はな。いつでもあんたのゲーム中毒を止めさせることができるんだぞ！」

「実！ まさかIDを消すつもり」

「ああ。そうだ。IDだろうがなんだろうが母さんがいねえうちに消してやることできるんだぞ！」

「や。やめてそれだけはやめて」

「なら。前みたいにちゃんと家事やってくれ。お願いだから！」

「は。はいい」

母さんは項垂れた。これで母さんも攻略完了だ。

「そして、社姉そんなに死にたいなら死んだらいい」

「っ！？」

「ただな。死ぬときは一緒だ。多摩川だろうが玉川だろうが四万十川だろうがこのままの状態が

「続くなら俺は死んでもいいと思ってる」

「実う」

そう言うと姉は恍惚な表情を見せてそして、目から光るものを編み出した。これで社姉も攻略完了だ。

「そして審お前は何がしたい。俺を罫にはめてそんなに楽しいか！」

「楽しいに決まってるじゃない。何が悪いの？」

「これでもそれが言えるのかな？」

そう言って俺はあるものを取り出した。それはチョコだ。しかもただのチョコではない。生チョコレートだ。あの舌に触るだけでとろけるような食感はまさに至高の一品。

「そ。そんなもので懐柔される訳がないでしょう」

そう言いながらすでに俺の手にあった生チョコは妹の口の中だった。

「な。なんでなの？ 手が。手が止まらない!？」

勝った。俺はやつらに勝ったんだ。俺の戦いは長い長いものだった。しかし今終止符が打たれたのだ。俺は思わず家から出て勝訴という紙を持ってご近所中を走り回りたい気持ちでいっぱいだった。

「さてと……。じゃあ父さんは旅に出るからな。後はよろしく頼む」

親父は何事もなかったかのように旅に出発しようとしていた。

「親父いいのか！ モアイ像を破壊するぞ！」

「やってみろ。息子よ」

ボカ

「ぐ。なん……だと」

割れないなぜなんだ。俺が不思議に思っていると親父は玄関の前で立ち上がった。親父の背後からはなぜか朝日が眩しい程に照らされて親父の姿がよく見えなかった。

「こんなこともあろうかとモアイ像には特殊コーティングしてある。それに割られてもまた盗りにいけばいいしな」

親父は眩しいほどの笑顔を残して去っていった。なんちゅう親父だ。世界遺産だぞ。そんな近所に栗拾いに行くような感覚で言いやがって。

「実。甘いわね。私は4IDよ。ひとつくらい消されてもなんとでもないんだから」

「く。というかどれくらいやってるんだ」

親父が去るのを見届けると母さんは俺に詰め寄って言った。俺はもうこの人はだめだと思った。勝手にいつまでもやってる。

「実？ 本当にやってくれるのか？ 私としては練炭とかがおすすめなんだけどな。どうだ？」

「いえ。それは言葉のあやですて」

「兄い。もうチョコはないのか。もう食べてしまったぞ」

更に社姉と審まで詰め寄ってきた。社姉がこんなに乗ってくるとは思わなかったし、箱で買っていたチョコがもうないので審の攻めもかわせない。

「チョコを早くよこせ」

「ねえ。それか。断崖絶壁から二人でダイブと言うのも素敵だと思うんだ。ああ。いいなあ」

「実！ やれるならやってみなさいよ！」

妹の目はドラック患者のように狂気の色に染まっていた。社姉は恍惚な表情で迫ってきた。母さんは今にも俺に殴りかかりそうな勢いだ。一気に立場が逆転し、俺は岐路に立たされていた。やっぱり俺はこの人たちには勝てそうに無いと思った。どうやら俺の体がそう思い込まされているらしい。さっきから体の震えが止まらなかった。

「もう勘弁してください。俺が悪かったです！」

「そう思うなら早く朝食作りなさい！」

妹がチョコの箱をひねり潰しながら言った。

「はい！ ただいま！」

俺は大急ぎで朝食を作りに行った。俺は目の前が霞んで見えなかったが耐え忍んでフライパンを振った。次こそは次こそは勝ってみせる。その日の朝食は ちょっと塩が効いていた。

妹 ざっとこんなものよ。みんな甘いんだから。

姉 よかった。実に匙なげられたらもう楽できないからな。

母 さすが審ね。これからもお願いね。

そんな不穏な会話をしているにも関わらず俺は健気に朝食を作っていた。

「お嬢様方ー。朝食ができましたよー！」

実の家族計画が成功する日は果たしてくるだろうか。